

続

徒然
つれづれ

モンスターペアレント

桑野 巍

児童生徒を含め学校関係者はいまストレスいっぱいの空間にいるという。どうしてなのか。私には理解できない。児童生徒が授業についてゆけないからなのか。友達付き合いや人間関係が築けないのか。いじめが後を絶たないからなのか。よく分からないので知り合いの真面目教師に聞いてみた。彼は「学校関係者や子どもの親たちとの人間関係は徐々によくなっており“ストレス空間にいる”とはオーバーな表現では」と言い切った。

一億総教育評論家の時代と言われて久しいが、次代を担う子どもたちの教育に対し、無責任な評論は不必要と言いたげで、彼は「私たちは毎日真剣に教育に取り組んでいる」と前向き。教育者はいかなる時代においても、いかなる場所においても「これだけは教育しておかなくてはならない」という使命感というか責務を持ち合わせていると彼は言う。彼の発言を耳にして、教育に対する不信の念はどこかに吹っ飛んで行きそうになった。

しかし、ある学識者の話では多くの教師が指摘するのは、親や地域社会が教育の必然性や時代性、道徳性など理念を理解していないという点だ。彼達は「子どもの未熟さは可愛いが、親が未熟なのはどうにもならない」との悲観論だ。家庭の中の教育力をどのようにして強めるかが課題だといひ、教育現場に過度な要求をつきつける親たちを「モンスターペアレント」と名付けて親攻撃を続けている。

世の親たちが学校（教師）側に不信感を持っている話はどこにでもあるが、常識はずれとしか言いようのない抗議や要求を突きつける現象はよく耳にする話だ。親たちは自分は正しい、理にかなっていると思ひ込んでの行動だろうが、無理難題をおつけてくると学校運営を目茶苦茶にしてしまうこともあるからこの怪物は厄介というほかない。

そこで今年3月大阪府教委がまとめた「学校・家庭・地域をつなぐ保護者等連携の手引き～子どもた

ちの健やかな成長のために～」を市町村課の手を煩わして取り寄せた。内容はずばりモンスターペアレント対応策作品だった。具体例も取り込んでおり学校関係者必携の参考書ともいえる。「教育日本一」を目指す大阪の教育水準の向上に役立つかどうかは別にして、大阪の大人たちが学校教育を理解する“チャンスパンフ”と位置づけてよく、子どもを持つ親たちも読んでほしいと思った。

学校教育の向上は地域社会の大人たちが盛り立てる。そして子どもたちも成長し、教師たちも成長するのだから、地域の誰もが主人公という意識が芽生えなければならない。そこには地域との連携と学校現場の情報の共有が必要なことはいうまでもない。地域ぐるみというか地域住民に全面的に関わってもらい、当事者意識を持ってもらうべきだろう。教育向上問題は道徳向上も含めて、いまや社会全体の大きな課題だから、学校現場だけに委せては無責任だろう。最近の各自治体の教育委員会の活動状況については無知の域を出ないが「地域の人たちが公立校を乗っ取ったらどうなるか」くらいの空想を議論してもいいのではないかとも思う。

いずれにしても、何かにつけて住民は“言論の自由”を謳歌し、自分たちの不平不満を吐露する時代、そこには必ずエゴイズムや甘え、甘やかしが存在する。不平不満の矛先は政治（家）、学校、役所、病院、公共交通機関を含むサービス業などに向ける。団体攻撃派もいるし、個人攻撃派も散見する。中には居丈高派もいるし、陰湿派も見受ける。教育界のモンスターペアレントがどの派かは知らないが、最近疑似モンスターペアレントが横行しているとも聞いた。こうした現象の早い沈静化を望む。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）